

海外英語研修実施報告ならびに改善策の考察

小山直子*

Report of the English Study Abroad Program at QIBA and Proposal of Measures for Improvement

Naoko Koyama*

Abstract

This paper describes the result of the English Study Abroad Program in Gold Coast, Australia, in 2008.

This program has a ten-year history, however what and how those students who participate in the program should learn does not seem to have been considered in depth.

Therefore, in this paper I attempt to analyze what the students learned or did not learn, and to propose what we will be able to do for our students who sincerely want to learn English.

キーワード

英語力、コミュニケーション力、Global mind、国際交流、ホームステイ

Ⅰ：はじめに

2008年8月本学の国際交流センター主催の海外英語研修に初めて引率者として参加した。オーストラリアのゴールドコーストでホームステイをしながらQIBA (Queensland International Business Academy) という語学学校で英語研修をする3週間の日程である。

引率者自身は滞在7日間、実質4日間の授業を学生と一緒に受けただけであるが、初めてであるが故に様々な問題点を発見し、今後の更なる研修成果に資せんことを願い、かつ、この研修が大学と短大双方に開かれたものであるので、多くの先生方ならびに日頃から学生のお世話を下さっている職員の方々にも知って頂きたく、ここに上梓するものである。

Ⅱ：実施報告

1. 研修先： QIBA, Coolangatta, Gold Coast, Austraria
2. 研修期間： 2008年8月23日～9月13日
3. 引率期間： 2008年8月23日～8月31日

*こやま なおこ：大阪国際大学短期大学部教授 (2008.10.3受理)

4. 参加者： 9名（男子学生3名：1年生2名、2年生1名
女子学生6名：1年生3名、2年生2名、4年生1名）
5. 報告：

8月23日

9：00 関西空港集合：

*団体カウンターでINT金森氏により書類のチェックを受けた後、インターンシップで研修中の大阪国際大学の学生に荷物の確認をしてもらう。全員終わって出国検査場前に移動。最後のプリーフィング。

☆学生達は若干緊張気味かつ不安げな表情。

11：00 SQ617便にてシンガポールへ。16：35着（時差1時間）

*出発のゲートを確認後一旦解散して再び20：00全員集合してお茶する。

21：10 SQ235便にてブリスベンへ。

8月24日

6：35着（SINとの時差2時間）

*JTBのガイドさんとQIBAのバスの運転手Robさんが出迎え。一路QIBAに。日曜で高速が空いていて1時間半で到着。その間ガイドさんの説明、注意事項など。

☆学生達は殆どが爆睡。

9：00 QIBAでKarenさんの出迎え。Common Placeなど施設の案内。

9：30～10：30 ホストファミリーの方達が学生の引き取りに。

☆学生達の不安はピークに達していたが、皆優しそうなお母さんで若干ほっとした感じ。

*Karenさんとガイドさんと打ち合わせ。

8月25日

8：30 授業開始：

*10分前には学校に到着するようにとの指示を全員守る。

*前日の様子を聞くと、皆、緊張しつつも特には問題なさそうでまずは安心。

*初日であるためプレースメントテスト実施。

60点満点のリスニングと筆記テストおよび簡単なインタビュー（Helmerさん）。結果、初級5人中級4人。

*授業時間は8：30～10：30 Morning Breakの後、11：15～13：15

Lunch Breakの後、13：45～15：00

*2時限目初級、3時限目中級のクラスを参観。

☆中級の学生1人が難し過ぎるから初級に行きたいと申し出があり、Helmerさんに相談。

OK。

☆初級の学生も難しいを連発。

8月26日

8：30 2日目の授業に全員遅刻もなく集合。

13：45 Gold Coast City Council LifeguardによるSurf Safety Lecture。

*その後先生と一緒にBeachへ。



海外英語研修実施報告ならびに改善策の考察

8月27日

8:30 1時限目の授業のみ。

11:15 QIBAのバスでCurrumbin Wildlife Sanctuaryへ。

16:30 再びバスでQIBAへ。

☆コアラと写真を撮ったり（有料）カンガルーに餌をやったり、蛇のショーやアボリジニの踊りを見たり、楽しそうだった。

8月28日 通常授業。

*初級も中級も問題なく進んでいるようなので、Helmerさんの許可を得て上級のクラスに参加。教える立場からも教わる立場からもいい勉強になった。

☆翌29日がゴールドコーストの祭日で学校が休み。翌々日30日の朝に小山が帰国するのでJTBの人との引継ぎも兼ねて全員でお茶。

☆クラスにいるブラジル人学生達が夜パーティをするので出席したいとの学生が半分程いたので、ホストファミリーに連絡することと、帰りの時間を守ること、単独行動はしないことなどを言い含めて許可。

8月29日 祭日。

*学生達はそれぞれに計画を立てていたので小山はバスで1時間のSurfers' Paradiseまで行きJTBのオフィスに寄りご挨拶とランチ。

8月30日

8:35 COACHTRANSというホテルまで迎えに来てくれるバスに乗ってブリスベン空港へ。11:00着。

14:45 SQ236にてシンガポールへ。20:45着。

*出発直前まで携帯電話は繋がるようにしていたが誰からもかかってこず、無事に過ごしているであろうと安心して電源を切る。

8月31日

1:10 SQ618にて関空へ。8:35着。

*携帯電話を返却して帰路に着く。

この後、学生達は更に2週間の研修をし、9月13日予定通り関空に到着。関空から学生代表が小山に送ってくれたメールを転記する。（原文のまま）

メール：全員何事もなく無事に日本に着きました！

オーストラリアでは本当にお世話になりました。

もう先生のおかげで凄く楽しい留学になりましたよ。

今すぐオーストラリアに帰りたいです。

少しずつ英語が理解できていく自分に感動しました。

大学生活の凄いい思い出です。

また守口に遊びに行きます！

あと打ち上げもやりましょうね♪

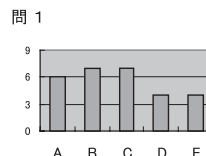
Ⅲ：研修後のアンケートおよび集計結果

＜英語研修アンケート＞

このアンケートは、海外英語研修に参加した学生を対象として、今後の改善に資するために実施するものです。その情報を参考に考察した結果を、国際研究論叢に発表する予定です。
(2008年9月 短期大学部 ライフデザイン総合学科 小山直子)

1. この研修に何を期待しましたか。(複数回答可)

- A：会話力の向上（6人） B：英語力全般の向上（7人）
C：コミュニケーション能力の向上（7人） D：異文化理解を深める（4人） E：友達を作る（4人）
F：その他（0人）



2. 研修を終えて、抱いていた期待に対する満足度は？

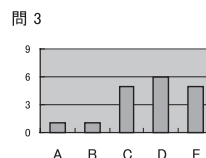
(それぞれの問いに対して)

- a：すごく満足 b：ほぼ満足 c：やや不満 d：まったく不満

- A：(a-4人)(b-2人)(c-2人) B：(a-4人)(b-3人)(c-1人)
C：(a-5人)(b-2人) D：(a-6人) E：(a-6人)(b-1人) F：(0人)

3. 研修を通して英語力全般で特にどのような点で向上が見られましたか。(複数回答可)

- A：文法力（1人） B：語彙力（1人） C：会話力（5人）
D：リスニング力（6人） E：コミュニケーション力（5人）



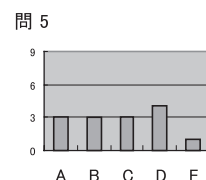
4. 研修期間中、予習・復習に平均どの位の時間を割きましたか。

- 平日 a：1時間以内（6人） b：1～2時間（0人）
c：2～3時間（2人） d：3時間以上（0人）
週末 a：1時間以内（5人） b：1～2時間（0人）
c：2～3時間（0人） d：3時間以上（0人）

5. 授業でどういう点、あるいは何が一番難しかったですか。

(複数回答可)

- A：聞き取り（3人） B：語彙（3人）
C：答え方（3人） D：文法（4人）
E：その他（友達との会話。)



6. 授業以外で難しかったことは何ですか。

- A：ホストファミリーとのコミュニケーション（6人）
B：クラスメートとのコミュニケーション（1人）
C：町中でのコミュニケーション（3人）
D：その他（特にない。）（1人）

7. ホストファミリーとの生活で

- A：楽しかったこと（jokeの言い合い。映画を見たこと。英語が上手になる。一緒にテレビを見た。一緒にテレビを見たこと。同じホストファミリーに中国人がいた{この学生は現在中国語を勉強中}。ホストファミリーとビーチに行ったこと。全て[食事、TV見たり、チョットした会話]。一緒にバーベキューしたり、ワインを飲んでいろんな話をしたこと。)
- B：学んだこと（思っていることは、はっきり言うべき。自分のことは自分でやる。異文化の生活のこと。水が大事。コミュニケーション。とにかくしゃべること。食文化、生活英語、表現法。気楽な考え方。)
- C：困ったこと（言いたいことの単語が見つからない。言葉。寝るのが早い。会話。言葉が通じないこと。質問の仕方。細かい部分の表現法。分からない単語がたくさんあるから会話がスムーズにできなかった。)

D：嫌だったこと（特にない。ご飯がまずい。インターネットがなかった。シャワー3分。シャワーの時間が短い。別にない。特にない。ない。）

8. 今後の英語の勉強について（複数回答可）

- A：もっと英語を勉強したいという意欲がわいた（8人）
- B：英語に自信がついた（2人）
- C：コミュニケーション力に自信がついた（3人）
- D：また機会があったら海外に行きたい（8人）
- E：また機会があったらホームステイをしたい（4人）

問8



9. 日本の文化について質問されましたか。

A：はい→何を？（総理大臣の選び方。スシ、食べ物、スモウ。父の日はいつか [オーストラリアは9/7 だったので]。)

a：答えられましたか？（はい：国民は選べない。）

B：いいえ（6人）

10. 研修に行く前と後で自分自身が変わったと思いますか。

A：はい→どういう点？（世界と視野が広がった。コミュニケーション能力の向上。夢を持つことが出来た。自信もって英語を使えるようになった。人見知りしなくなった。何となく目標が持てた。目標が見えてきた。世界観が変わった。小さいことにとらわれなくなった。）

B：いいえ（1人）

11. 外国あるいは外国人に対して考え方が変わりましたか。

A：はい→どういう点？（外国人はすばらしい！もっと好きになった。結婚したいと思えるようになった。予想より親しくなれた。）

B：いいえ（3人）（あこがれている外国人のままでした。）

12. 日本の文化との違いについて何を感じましたか。（自由記述）

- ・みんなフレンドリーで優しく、笑顔で忙しくなくて日本とは全然違うと思った。
- ・ごはんがまずい。
- ・毎日寝る時間がとても早くて寝られなかった。
- ・みんな心やさしかった。
- ・言葉が通じなくても助けてくれた。
- ・ハゲしまくれる。
- ・歩行者が本当にいない。
- ・沢山あった。
- ・時間の感じ方。
- ・食事。
- ・交通手段（自転車をほとんど使わない。）
- ・morning break とlunch break があってmorning break で昼ごはんを食べたこと。
- ・りんごは皮をむかず、そのままかぶりついたこと。
- ・シャワーオンリーなこと。
- ・バスの運賃は先払いで、降りる時はアナウンスなくて自分で見とくこと。
- ・横断歩道を渡ってる時や渡る時の待遇。
- ・お酒は18歳から飲めること。
- ・スーパーマーケットでの出入り。
- ・甘いもの好きなこと。（カレーにアプリコットやバナナが入っていたり。）
- ・TVのコマーシャルの時間帯。
- ・休日の過ごし方。（ビーチでのんびりとか。）

- ・キャミソールから冬物着てる人まで服装では季節感がない。
- ・水を大切にする。

Ⅳ：アンケート分析

このアンケートは参加人数9人で母数が少数ではあるが、第1回目として彼らが「何を学んだか。そして、何を学ばなかったか。」という点に照準を絞って分析する。

1. 「この研修に何を期待したか。」という問いに対し、
「会話力の向上」(6人)「英語力全般の向上」(7人)「コミュニケーション能力の向上」(7人)は当然のこととして、「異文化理解を深める」(4人)「友達を作る」(4人)の数字がほぼ想定内としても、もっとこれらに関して期待されるべきであるし、そのように指導していくべきだと考える。即ち、何のために英語を勉強するのかという根本に立ち戻った時、言語を単なる言語としてだけでなく、その背景の文化も学び理解してこそ意味があることを教えなければならない。
2. 「研修を終えての満足度は」
a: すごく満足 b: ほぼ満足 c: やや不満 d: まったく不満
A (a-4人) (b-2人) (c-2人) B (a-4人) (b-3人) (c-1人) でA「会話力」とB「英語全般」に「やや不満」がいるのは問題にすべきである。それが本人の努力が足らなかったからなのか、それともプログラム、あるいはクラスとの不適合にあったのか今後のためにも検証する必要がある。
それに対して、C「コミュニケーション能力」に関しては(a-5人)(b-2人)と、「満足」に振れているし、期待しなかったD「異文化理解」(a-6人)とE「友達を作る」(a-6人)(b-1人)に「満足」のチェックが入っているのは注目に値する。
3. 「英語力全般で特にどのような点で向上が見られたか。」
「文法力」(1人)「語彙力」(1人)「会話力」(5人)「リスニング力」(6人)
「コミュニケーション力」(5人)
これは日本とQIBAでの授業形態ならびにクラス構成人数の違いによる結果であろうと思われる。即ち、QIBAでは教科書はあるものの、ペアワークと個人の発表に重点が置かれているようであったが、それは10人から多くても20人以上という構成人数であるから可能であり、日本における授業との直接の比較は難しいと考える。
4. 「授業でどういう点、あるいは何が一番難しかったか。」
「聞き取り」(3人)「語彙」(3人)「答え方」(3人)「文法」(4人)
ここで「文法」と答えた学生が4人もいたことはある意味で特筆すべきことである。(QIBAの授業では決して難しいことを学ばせているわけではなく、ごく基本的な文法事項の演習、exerciseがあっただけであるにもかかわらずである。)
なぜならば、恐らく、海外英語研修で「文法」を期待する学生はほとんどいないのが普通であって、前の問いで「文法力」に向上が見られたと答えた学生が1人いたが、実際の授業では「文法」が弱いと授業が難しく感じられるという現実がある。
最近の中学からの学校英語の現場での、コミュニケーションが重視されるが故に文法が軽視されている実情から見ると、文法あつてのコミュニケーションであると、声を大にして言いたい。
5. 「コミュニケーション」の観点から：
「ホストファミリーとのコミュニケーション」が難しかったと答えたのが6人と多かったのは一緒に過ごす時間が一番長いから当然で、「クラスメートとのコミュニケーション」は友達がいるから問題ないし、「町中でのコミュニケーション」も一人では

ないのでそれ程負担には感じなかったのであろう。

6. 「今後の英語の勉強について」

ほとんどの学生が「もっと英語を勉強したいという意欲がわいた」（8人）としたのは、正にこの研修の目的に合致するものである。3週間で英語力その他の能力が飛躍的に付くものではないわけで、何よりも今後の勉強のきっかけ、即ちモチベーション向上が研修の大きな目的の一つであることは言うまでもない。

更に、「また機会があったら海外に行きたい」（8人）とほとんどの学生が考えていて、それは「英語に自信がついた」（2人）あるいは「コミュニケーション力に自信がついた」（3人）からというのも一面であると考ええる。

「また機会があったらホームステイをしたい」と4人の学生が答えているのも、同じ理由であると同時に、良きホストファミリーに恵まれたことの証左であらう。

7. しかしながら「研修期間中の予習・復習」に関しては、平日が1時間以内（7人）2～3時間（2人）で、週末は1時間以内（6人）1～2時間（1人）というのは、特に宿題もない状況では仕方のないことかも知れないが、知識の定着という観点から予習・復習の重要性を知らしめ奨励すべきである。

8. 自由記述に関して：

「研修に行く前と後で自分自身が変わったと思いますか。」という問いに対して、『世界と視野が広がった。』『コミュニケーション能力の向上。』『夢を持つことが出来た。』『自信をもって英語を使えるようになった。』『人見知りしなくなった。』『何となく目標が持てた。』『目標が見えてきた。』『世界観が変わった。』『小さいことにこだわらなくなった。』と極めてポジティブな答えが並んだのには研修の企画実行する側の立場から拍手喝采したいほどである。

「学んだこと」の中に『思っていることは、はっきり言うべき。』『自分のことは自分でやる。』『コミュニケーション。』『とにかくしゃべること。』など、日本人の欠点とされていることをきちんと自覚できたことは素晴らしい成果である。

また最後の「日本文化との違いについて何を感じたか」という質問に対しても、彼等の文化の違いに素直に驚き感動している様子が見受けられる。

V：総括

1. 全体的には、QIBAは大阪国際大学受け入れ10年とのこともあり、我々に対して親切かつ適切に対応してくれた。4人の先生の授業に参加したが、皆、とても熱心で教え方も上手であった。

2. 当初、問題点として思ったのは（現在は全く違うが）、プログラムの中で、Currumbin Wildlife Sanctuaryへ5時間余りも費やしているのは、たった3週間しかない研修の中で（QIBAでは6週間を最小単位としての授業計画を立てている）、本来の英語研修の趣旨に反するのではないかという点である。（Currumbin Wildlife Sanctuaryでは、広大な自然公園の中で放し飼いにされているカンガルーに餌をやったり、コアラを抱いて写真を撮ってもらうコーナーがあったり、オーストラリアにしか生存していない動物を見たり、先住民アボリジニのダンスを見たりした。）11日に予定されているByron Bayには丸1日をかけている。

3. これらの所謂outdoor activityが、どういう目的で計画され、どのような教育的配慮で組み込まれたのか、QIBAのDirectorであるHelmerさんに問い合わせをした。（若干長いがほぼ全文を載せる。）

『当プログラムは“英語と文化を統合した教育的プログラム”であり、“オーストラリア最東端のByron Bayへ行くことと、先住民アボリジニの文化の体験を含む

Currumbin Natural Sanctuary訪問とは、オーストラリア社会の研究に厚みとその背景への理解を付与する”ものである。教育的見地から言えば、“これらの実地研究（field studies）は地理的見地および現地の英語体験という点において重要な要素であり、ホームステイファミリーの英語に対して補完的な役割を果たすものである。そうしてそれらが、学生たちの今後の言語習得の伸張と実生活でのさまざまなコミュニケーションにおける個々人の国際的サバイバル術の発展に寄与するものである。”』

との回答を得た。

4. そうであるならば（引率者は不覚にもそのような認識のないまま参加した）、本学として、そのための事前準備が必要であると考え。即ち、参加する学生達に、上記のような目的と教育的観点を明確にして知らしめること。パンフレットあるいはインターネット情報を与えるか、彼ら自身で調べさせて予備知識を与えること、が非常に重要となってくる。
そうすることによって初めて、Currumbin Wildlife SanctuaryとByron Bayへ行った意味を発見できるのである。
5. この研修が英語研修であると同時に異文化理解、即ち、オーストラリアの文化の理解を深めるという観点も当然あるわけで、後でも述べるが、言語の理解は、背景となる文化の理解なしにはありえないことを周知徹底すべきである。
6. もう一つの問題点として、9月の1日、4日、8日に、JTBからガイドが学生の様子を見にQIBAまで来ることになっているが、3回も来る必要があるのであろうか。QIBAで勉強していた他の学生達は、日本人も外国人も、団体も個人も、もっと自立して生活をしていて、問題があれば学校に来て友達に相談しているようであった。28日に小山がJTBのスタッフと引継ぎをした時に、何か困ったことがあった際の連絡先の電話番号（現地JTB責任者の携帯）を全員に知らせたのでそれで十分ではないのか。
7. ただし、過去に必要な事情があった故に行われている措置かもしれないし、安全・安心の確保という視点からは重要であることは確かではある。
8. この「安全・安心の確保」という観点から言えば、Currumbin Wildlife SanctuaryもByron Bayもカリキュラム内で先生の付添いで行くというのは目的に適っている。何か事が起こった時の対応と責任の所在を明確にすることによる安心感を、学生自身と学生の保護者に与えることは、大学主催の研修にとって非常に重要なことであることは言うまでもないからである。
9. 本学の学生達も初日こそ不安そうな表情を浮かべていたが、2日目以降は自分のペースを掴んで元気に楽しんでいた。授業が午後3時に終わり、家に帰るまで時間があるのでそれぞれビーチに行ったり、友達とお茶したりと、十分に時間はあった。

Ⅵ：問題提起と改善策

1. アンケート：
一般的なアンケートとレポートの提出は現在実施されているが、研修前と研修後の英語学習に関するアンケートはこれまでされて来なかったのが現状である。
従って、今回、研修後に初めて英語教育に特化したアンケートを実施したが、次回からは研修前にも実施できる方向で進めるものとする。
2. 研修前教育：
スタディ・アブロードの単位を与えるのであるから、そのための事前準備、教育が必要と考える。即ち、ホームステイ先または他国の学生から質問されるであろう、ある

いは、日本人として知っておくべき日本の文化をきちんと説明出来るように理解し、更に、それらを英語で暗記することなど。他には最低限のコミュニケーションのための表現法と文化の違いをレクチャーする。

3. 研修後教育（反省会）：

帰国後に英語学習上の疑問点および今後の勉強の仕方などを教師の助言を受けながら学生人員で討議し、同時に、ホームステイ先や他国の学生から日本について実際何を聞かれたか、どういう点で困ったか、どう処すればよかったか等、異文化コミュニケーションの観点から議論して、学生自身のGlobal mind の育成に役立てる。（これに関しては、今回研修後に実施したアンケートの質問項目に入れてある。）

4. 学習目標：

学生が身に着けるべき学習目標を明確にすること。即ち、この研修において何を学ぶべきか、何を学びたいか、を項目で挙げることで、学生が漫然と授業を受けたり、ホストファミリーと過ごしたりすることなく、具体的で明確な目的意識を持つことよっての研修効果は飛躍的に増大するものと信じる。

5. Student portfolio ^{注1:}

Teaching からLearningへのパラダイムシフトが叫ばれている昨今、具体的には、Student portfolio を作成し、その中には前項で掲げた学習目標があり、学生が何を学びたいか、何を学ぶべきか、を学生自身が自覚できるようにし、そうして何を学んだか、何を学ばなかったかを明確にする仕組みを作ること。

VII：おわりに

アンケートの分析と問題提起ならびに改善策を述べてきたが、提出されたレポートを読んでも総体的に学生の満足度は非常に高く、本研修そのものの目的は一応果たされたと思えてよいであろう。

しかしながら、この海外英語研修が、本学の英語教育上に更なる貢献を果たす可能性を考えた時、Student-oriented なプログラムの中でGlobal mindの育成と学生自身の英語力向上、および、国際交流に資するために、前項で述べたような改善策、即ち、Student portfolio の作成、学習目標の明確化、研修前と研修後の教育、更には1年後、2年後の追跡調査とフォローアップが必須と考える。

今回、研修後のアンケートは実施できたが、次回の研修に向けて、研修前のアンケート、ならびに、研修前と研修後の英語テスト（学生自身が自己の進歩を実感できるもの）の作成を勘案するものとする。

尚、国際交流は国境を越え、人や物や情報が出会い、入り混じり、影響を相互に与え合う行動または現象を指す言葉で、社会的・文化的背景を異にする人々が、言語および非言語的メッセージを通して、考え方、価値観、感情を相互理解するプロセスを「異文化間コミュニケーション」という。このコミュニケーションを深めるための能力をコミュニケーション能力（Communicative competence）という。この能力は、

- (1) 異文化の人たちと積極的にコミュニケーション活動を展開しようとする態度
- (2) 対人関係上の規則や様式を把握し、必要な行動をする状況判断能力
- (3) 聞く、話す、読む、書くという言語行動能力
- (4) 声の大きさや高さ、話す速さ、沈黙、笑い声などや顔の表情、視線、手のジェスチャーなどの非言語行動能力
- (5) 目的に従ってコミュニケーション活動を開始し、発展させ、完了させる能力というものを要素として、相互に関係させながら全体として機能させる能力

といわれる。(実際には様々な定義がされている。)この能力には個人差があり、コミュニケーションの結果は少なからず異なる。

しかしながら、少なくとも経験を積むことによって培われる要素が多いことも事実であって、その意味で本件のような海外英語研修が、本学の学生に対して、Global mindを持ち国際的に活躍できる人材育成に果たす役割は甚大である。

注1：「自己学習点検簿」とでも言うべきもので、定型は定まっていないが、そこには学生の現在および過去の受講科目、担当教員、提出したレポートの項目、論文の題名、試験の成績と結果、他の学習内容など多岐にわたる個人の情報を含むファイルであり、学習の進捗状況を学生自身で把握し、なおかつ、必要とあらば関連する教員に関係する内容を提出できるものとして使うことも可能である。

参考：QIBAで使用しているテキスト：Cutting Edge (Longman)
Elementary Course/ Intermediate Course/ Advanced Course

参考文献：「異文化コミュニケーション・キーワード」古田暁、石井敏、岡部朗一、平井一弘、久米昭元、江草忠敬、有斐閣双書

“異文化間コミュニケーションとは”、石井敏、「留学交流」
日本国際教育協会編集、文部省留学生課監修 vol. 4, no. 1, pp. 2-5, 1992

“異文化間コミュニケーションと留学生”、原裕視、「留学交流」
日本国際教育協会編集、文部省留学生課監修 vol. 4, no. 1, pp. 6-9, 1992